

宮沢賢治のオルゴール

信時哲郎 ◆ のぶとき・てつろう

賢治とオルゴールといえば、『春と修羅（第一集）』の「風景とオルゴール」を思い出す人も多いかと思う。まず「風景とオルゴール」の後半部分を引用しておこう。

風がもうこれつきり吹けば

まさしく吹いて来る劫カルバのはじめの風

ひとときれそらにうかぶ暁のモテイーフ

電線と恐ろしい玉髓キヤルセドニの雲のきれ

そこから見当のつかない大きな青い星がうかぶ

（何べんの恋の償ひだ）

そんな恐ろしいがまいろの雲と

わたくしの上着はひるがへり

（オルゴールをかけるかけろ）

月はいきなり二つになり

盲ひた黒い暈をつくつて光面を過ぎる雲の一群

（しづまれしづまれ五間森

木をきられてもしづまるのだ）

賢治はオルゴールを電線とセットで登場させている。

強風が吹きつける日に電線が大きな音で鳴るのを聞いたことのある人は多いと思うが、あの音からオルゴール（music box）の音を連想できる人はいるだろうか？ 風に鳴る電線の音はオノマトペにすればビュービューかゴーゴーだろうが、オルゴールの音は金属的なキンキンあるいはティンティンといったところだと思う。

もちろん「オツベルと象」で、象に「グララアガア」と叫ばせた賢治なので、凡人の言語感覚と異なっているも何ら不思議ではない。しかし「グララアガア」ならば、なるほど象の声はそんな風にも聞こえるな、とも思えるのだが、電線の音とオルゴールは、なかなか結び付かない。賢治は本当に music box を想定して書いていたのだろうか？

『春と修羅（第一集）』の「ぬすびと」にもオルゴールは登場する。ここでも、やはり電線と一緒にだ。

青じろい骸骨星座のよあけがた

凍えた泥の乱反射をわたり

店さきにひとつ置かれた

提婆のかめをぬすんだもの

にはかにもその長く黒い脚をやめ

二つの耳に二つの手をあて

電線のオルゴールを聴く

『新校本宮沢賢治全集』の索引で「オルゴール」を引いてみると、この二作の他にも、「〔冬のスケッチ〕」の第三八葉に「電信のオルゴール／ちぎれていそぐしらくもの／つきのおもてをよぎりては」とあり、また「春と修羅 第二集」の「空明と傷痕」にも、「月をかすめる鳥の影／電信ばしらのオルゴール」とあった。「オルゴール」は、例外なく電信柱か電線、そして強風（これは明確に書かれていない場合もあるが）とセットで登場している。

佐藤栄二（「賢治詩の隠れた（風）（5）」オルゴールを鳴らす風」「賢治研究85」宮沢賢治研究会、二〇〇

一・八）は、オルゴールの本来本元ではないかとして「シグナルとシグナレス」で電信柱が歌う歌を引用するが、たしかにそのとおりで、この音を他作品ではオルゴールの音としていたのだと思う。

『ゴゴン、ゴーゴー、

うすい雲から

酒が降り出す、

酒の中から

霜がながれる。ゴゴンゴーゴー

ゴゴンゴーゴー霜がとければ

つちはまっくら。

馬はふんごみ

人もべちやべちやゴゴンゴーゴー、』

しかし佐藤は「大きく回転する円筒形の「オルゴール」装置を幻視とも見、幻聴とも聞いたとし、賢治が風の音と対応させたのは「music box」だとしているようだ。オルゴールとは、表面に針を植えつけたシリンダーや円盤（ディスク）で金属片をはじいて音を出す装置だが、ゴゴンゴーゴーという電線の音は、シリンダー式であったとしても、ディスク式であったとしても似つかわしく

ない。しかし、それについて佐藤は特に言及していない。私市由枝（「風景とオルゴール」「雲の信号7」千葉賢治の会、二〇〇八・九）も、「オルゴールとはぜんまいじかけで音楽を奏する楽器であって、ぜんまいねじをまわした分だけ自動的に音がでることから、絶え間なく吹く風のイメージをなしている。風よどんどん吹け、自分がおこした恋の償いのためだから風がどんなに吹こうと受けて立つ覚悟だというような心意気が伝わってくる」としており、やはり「music box」説に立っているようだ。

佐藤泰平（「暁のモテイフ」とオルゴール」「宮沢賢治学会イーハトーブセンター会報 オリザ」宮沢賢治学会イーハトーブセンター、二〇〇九・九）も「music box」説で、『春と修羅』を刊行する際の「風景とオルゴール」の印刷用原稿に登場する「ひとときれそらにかぶウキリアムテル暁のモテイフ」から、賢治が「ウイリアム・テル序曲」が演奏されるオルゴールを念頭に書いたのではないかとしている。佐藤は日本中のオルゴール関連施設を探し、岡山のオルゴール店、天童市オルゴール博物館、文京区のオルゴールの小さな博物館にそれが実在したことを報告している。

赤崎学（『春と修羅』と、オルゴールの謎」「賢治学5」東海大学出版部、二〇一八・七）は、何度も同じ

メロディーを繰り返すオルゴールが賢治の念頭にあったとして、循環する季節、循環する風景を象徴するものだったとする。やはり「music box」説だ。

漏れているものもあるかもしれないが、「風景とオルゴール」を論じた多くの論者も、特にオルゴールが「music box」のことだと述べてはいなくても、おそらく頭に描いていたのは「music box」のことだったのであるかと思う。というのも、ほかならぬ私もその一人であったからだ。

そんな私が「music box」説を改める気になったのは、神戸市内にある六甲オルゴールミュージアムで賢治と音楽についての講演を依頼され、賢治とオルゴールについて調べ始めたためだ。新聞のデータベースで「オルゴール」を検索してみると、明治年代に流行した「紙腔琴」というものが見つかり、その存在に気づかされた。

「しこうきん」と読むらしく、手回しオルガンのことで、「music box」と同じ自動演奏装置なのだが、金属板を弾いて音を出すのではなく、風でリードを震わせて音を出すオルガンの原理を生かしたもので、広義の「オルゴール」とも言うべきものだ。『日本国語大辞典』（Japan Knowledge）では「しこうきん」で項目が立てられ、「オルゴールの一種。長方形の木箱の中に金属製

の簧（した）と鞆（ふいご）をそなえ、楽譜をきざんだ巻紙（譜箋）をその上を通し、把手（とって）をまわすと譜箋の曲調を奏するもの。明治二三年（一八九〇）戸田欽堂が発明し、栗本鋤雲が命名。明治時代に流行した。しくうきん」とある。

YouTube の動画（「紙腔琴 日本製オルガニート」
端 雪はともへに” オルゴールの小さな博物館”
https://www.youtube.com/watch?v=nv1v_QBI-k）で確認してもらえれば分かると思うが、「破窓吟風ノ現象ヨリ」（倉田繁太郎『紙腔琴の葉』（十字屋音楽部、一八九三・八）ヒントを得たという言葉通り、足踏み式オルガンやハーモニカに似た音で、強風の中の電線の音に似ていないこともない。強風にしては、やや頼りない気はするものの、「music box」よりは違和感がない。

『日本国語大辞典』の「しくうきん」の項に用例として田山花袋の『妻』（一九〇八〜一九〇九）があがっており、「裏の間に紙腔琴（シコウキン）が一箇置かれてあった」とある。また『日本国語大辞典』には「しくうきん」という項目も立てられているが、そこには内田魯庵『くれの廿八日』（一八九八）があがっており、「うむ：グラモフォーンを携帯（もって）って紙腔琴（シコウキン）より外知らない田舎者を驚かしてやりませう」と

いう用例が載っている。グラモフォーンは開発されたばかりの円盤式蓄音機で、都会人だけが知っているもので、田舎者は知らなかったと、田舎を小馬鹿にした記述なのだ。これは逆に紙腔琴が日本の「田舎」と呼ばれる地域でも普及していたことを裏付けてくれよう。テレビやラジオはもちろん、各家庭でピアノやオルガンを持つのも稀で、また蓄音機も普及していなかった時代に、紙腔琴は意外なくらいに普及していたようである。

このくらいに用例があれば、賢治もどこかで見聞きし、耳にし、風の音のたとえとして紙腔琴を持ち出したとしても不思議ではないように思う。

オルゴールは、十七世紀頃、スイスの時計職人たちが自動演奏器具として制作したのだが、日本では一七五〇年（寛延三）刊の『紅毛訳問答』に「オルゴルナ」として登場するという。しかし、名村義人（『アンティーク・オルゴール物語』新潮社、一九九五・四）によれば、これはオルガンを指したのではないかという。『世界大百科事典』（Japan Knowledge）の「自動楽器」の項目には「もつとも古いものはカリヨンで、14世紀にはすでに自動演奏されている。16世紀以降は自動のオルガンやパーシナルが愛好された。自動オルガンは18〜19世紀にイギリスの教会でも使われ、19世紀にはロール紙を用い

た機構が発明された。これは、音の高さと長さに応じた穴があげられた紙を送って空気の流れを断続させ、空気の圧力を利用して楽器を演奏する仕組みで、演奏時間が制約されない利点をもつ」とあり、オルガン、オルゴール、自動楽器は、しばしば混同されてきたようである。

金子敦子（「紙腔琴の歴史」）「お茶の水音楽論集 特別号」お茶の水音楽研究会、二〇〇六・一二）によれば、蓄音機が普及するまで、紙腔琴は自動演奏装置として教育現場で使われるなど、相当な知名度と売り上げがあったように、製造台数は五八〇〇台ほど、販売所は北海道から鹿児島に至る全国に一七箇所あり、「紙巧琴」「紙風琴」「風調琴」「紙風琴」などの類似品もあったという。「読売新聞」のデータベースで調べたところ、「粗悪の偽物現わる御注意」（一八九六・一・一四）といった広告も掲載されるほどであったから、同時代的には広く知られていたものだと考えてよいだろう。

牧師で教会音楽家でもあった津川圭一（「今も懐かしきオルゴールの音」『東京朝日新聞』一九三七・一・二八）は、紙腔琴について「僕も子供のとき、横浜の友人の家で見たのを覚えてゐる」と書いており、また三浦俊三郎（『本邦洋楽変遷史』日東書院、一九三一・一〇）は、「汽車に十里も行かねば乗れぬ東北海岸の小さな町

で育った自分にも明治三十年当時既に此の楽器を弄んだ事を小さい記憶に存して居る。その普及の程度も想像される」と書いている。三浦の生年や出身地は確かめられなかったが、「東北海岸の小さな町」でも手にする者があったことを思えば、花巻の裕福な商人の子・宮沢賢治が知らなかったとはいいにくいし、同時代の読者も、オルゴールという言葉から、いわゆる「music box」ではなく、紙腔琴の方を想像した可能性もあるように思う。

とは言え賢治が紙腔琴のことをオルゴールだと認識していたと断定できる決定的な証拠はない。『定本宮沢賢治語彙辞典』にはオルゴールの項目もないし、索引でも拾われていない。それほどに「music box」説は疑われていなかったというように思うが、これまで論じてきたように、賢治はオルガン風の音色を持った紙腔琴か、その類似品を頭に置いて「オルゴール」の文字を書きつけたとした方が無理がないように思う。

思えば、賢治作品において「風の声」は、原点ともいうべきものであった。『注文の多い料理店』の「序」で、賢治は「十一月の山の風のなかに、ふるえながら立ちましたりしますと、もうどうしてもこんな気がして仕方ないのです。ほんたうにもう、どうしてもこんなことがあるやうでしかたないといふことを、わたくしはそのとほり書

いたまでです」と書いており、事実、童話「鹿踊りのはじまり」や「サガレンと八月」などでは、吹いていた風が人間の言葉をささやくように感じられたところから物語が始まっている。

そんなことを思い出してみると、賢治が聞いた「風の声」について、私たちは、これまでとは異なったイメー



ジで作品を読み直す必要があるのかもしれない。

※本稿の成立のきっかけを与えて下さった六甲オルゴールミュージアム、同館学芸員の崎本恵里奈さん、画像の掲載許可ならびにご助言をいただいた名村義人さんに雑面を借りて御礼申し上げます。

